

# 國語讀本

高等  
學校用

卷七

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	款	國語項
目		次
全	(冊ノ内第	冊
分類 番號	第	號

272.82

24588

T1A3

10

Ts21

47907

文學博士坪内雄藏著

# 國語讀本

高等小  
學校用

卷七

東京

合資  
會社

富山房藏版

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 8 5 6 a

福岡教育大学蔵書



種、是れなり。

蒙古人種は、黃人種ともいふ。皮膚の色は、黃なるを常とす。顔は、稍、平かにして、廣く、頬骨は高く、眼は小にして目じり、少しく舉り、眼睛黒く、髪は黒く、鬚は多からず。支那人は、その雛形なり。亞細亞大陸



の人種は、多く、此の種に屬し、日本人も、通例、此の中に算入せらる。歐羅巴人にては、土耳其人、之れに屬す。

頬骨  
眼睛

額

總數、凡そ六億五千萬人あり、といふ。

コーカサス人種は、皮膚の色、白くして、櫻色を帶ぶ、故に、白人種とも稱す。額廣く、顔や、長く、鼻高く、目じり舉らず、眼睛、或は青く、或は茶色なり。髪は、毛は、黃色なるを常とし、縮れたるが多く、口鬚、頬鬚、共にゆたかなり。歐米人は、大抵、白人種なり。其の總數、凡そ五億七千萬人あり、といふ。



唇 膠 米



アフリカ人種は、皮膚の色に因みて、黑人種ともいふ。鼻は幅廣く、太く、唇はつき出でて、唇厚く、額低く、髪は黒く、短く、縮れ、口鬚、頬鬚、共に少なし。亞弗利加の土人、及びオーストラルエーシヤの土人の一部、之れに屬す。總數、凡そ

一億二千萬人なりといふ。

褐

マレー人種は、褐色人種とも云ふ。外貌

は、略蒙古人種に似たれど、頭の格好と眼の



色とは、コーカサス人種に似たり。鬚は多し、マレー半島、及びマレーシヤ諸島の土人は、多く、是れなり。總數、凡そ四千萬人といふ。

アメリカ人種は、銅色人種ともいふ。鼻



高く、頬骨秀で、眼は長く、眼晴黒く、髪は直立して、黒く、鬚は、甚だ少なし。南北亞米利加の土人は、之れ

に屬す。總數凡そ二千萬なり。

以上は、身軀上の或特質に基きて、區別せる人種の分かちなるが、開化の程度、即ち、智力發達の差等に基きて、大軀の階級を附するを得べし。但し、人の智力は、經驗、學問等によりて、長からぬ間に進歩するものなれば、豫め、人種によりて、定めをなすは、道理に違へり。通例は、白人種を、第一等の文明に在るものとし、黃人種を、第二等とし、銅人種以下を、未開の状態に在るものとすれど、

そは、只、現在の有様につきて、概評せるのみ。

## 第二課 世界周遊(一)

横濱港より、米國行の便船に乗り込めば、見送りの人々、波止場に群がりて、帽子、ハンケチを振りて、別れを惜む。こなたも、心残らぬにはあらねど、噂にのみ聞きたる外國を、やがて、親しく觀ることゝ思へば、さすがに、樂しさの胸に溢る。

日本の陸は、遠ざかりゆきて、日の沈むと

*	*	赭
共に、見えずなる。船、黒瀬川に入る。		
布哇 <sup>ブワ</sup> に寄港して、出稼人を下ろし、石灰を積み込む。東するにつれて、日出の時間、追々早くなり、時計と合はぬ様になる。		
かくて、更に東行すること、半月餘にして、亞米利加の大陸見え始む。船は、左右に峙てる山の間に進み入る。山は、赭色を帯び、樹木、また異様なり。之れを桑港 <sup>サンポート</sup> の港口とす。灣内には、汽船群集し、陸には、家屋立ち並び、白壁は、日光に輝き、無數の烟突より吐		

煤烟	*	*	泥濘	哩
き出だす煤烟、空に漲る。こゝまでの海路は、二千五百餘哩 <sup>マイル</sup> なり。				
汽船、波止場に横づけとなるゆゑ、艀 <sup>ベシヤ</sup> を要せずして、上陸す。税關にて、貨物の調べをなす。市中の商家は、意匠を凝らして、商品				
を飾りつけ、街路は、石疊なれば、雨降るも、泥濘となることなし。滞在一週間にして、大陸鐵道に乗りて、紐育 <sup>ニユーヨーク</sup> に向ふ。この鐵道は、桑港 <sup>サンポート</sup> より、紐育に至るまで、大陸を横斷すること三千三百四十五哩 <sup>マイル</sup> 、八十七時五十分				





※	書肆	耽讀
<p>いへり、蠟燭商の子にして、北亞米利加のボ ストン市に生れたり。七歳の頃、小學校に 入りしが、家計不如意なりしかば、幾程もな く、退校し、家業の手傳ひをなす傍ら、父に就 きて、讀書、數學等を學びき。</p>	<p>十二歳の頃、印刷業見習ひの爲めに、兄の 家に寄食せしが、そこで、二三の書肆と知 る人になりぬ。讀書好きなるフランクリ ンは、こゝに、書籍借覽の便宜を得て、手に入 る限りの書を耽讀し、終には、兄に請うて、三</p>	

購	卒	※	電
<p>度の食を粗にし、其の費の餘れるを貰ひ受 けて、好める書を購ひて、讀みき。</p>	<p>十七歳の時、只ひとりにて、縁者も、知る人 もなきフ、ラデルフ、ヤの市に出て、辛うじて、 五シリングの日給を得る身となりて、自 活の道を立てたり。かくて、種々の困難あ りしにも係らず、勤勉苦學の功を積み、遂 に、大理學者の名譽を博するに至りき。</p>	<p>雷電は即ち電氣なり、といふ説を唱へ出 だし、は、フランクリンを以て、始めとす。</p>	

\* \*

今は此の理を信ぜざる者一人もなければ、フランクリンが始めて唱へし頃には、學者すらも之れを信ぜざりき。されど、自信強きフランクリンは、聊かも屈する色なく、自説を證明すべき機の到るを俟ちぬ。

さる程に、一日雷雨、激しく來りぬ。よき折からと思ひければ、フランクリンは一の紙鳶を作りて、その骨に、鋭く尖りたる鐵線を裝置し、且つ其の他にも、電氣を試験すべき種々の方法を工夫し、さて常の如く、絲加

鍵

痺痺

\*

讚歎

減して、之れを、空中に、高く放ちぬ。暫くして、案の如く、電氣傳はれりと見えて、絲に附けおきたる鍵に異狀あり、手を觸るれば、火花を放ち、且つ、痺痺を感じたり。こゝに於てか、雷電の電氣たることは、最早、疑ふべくもあらざりけり。

フランクリンは、自説の確證を得て、大いに悦び、更に、一大論文を發表せり。世人、ここに至りて、フランクリンが學才の大なるに驚き、讚歎して止まざりけり。今の所謂

※ 避雷針は、此の理に基きて、のちに、フランク  
リンが工夫せしものなり。

※ 摩擦 電氣  
フランクリンは、理學者としての名譽あ  
るのみならず、合衆國の獨立にも、與りて力  
ありき。就中、戦後の經營の如きは、此の人  
の盡瘁に負ふ所少からざりしなり。

#### 第四課 電 氣

破 摩 擦  
物體が、摩擦セラレタル時、熱セラレタル  
時、或ハ化學的變化ヲオコシタル時等ニハ、

コレガ爲メニ、其ノ物體ニ電氣ヲオコスコ  
トアリ。

※ 牙  
試ニ、寒ク牙エタル冬ノ夜ナド、暗キ處ニ  
テ、猫ノ脊ヲ掌ニテ、逆ニ摩擦センニ、一種ノ  
光キラメキ出デ、一種ノ音ヲサヘ發スベシ。  
又、同ジ頃、空氣ノ乾燥セル際、暗中ニテ、髪ヲ  
梳ランニ、マタ、同様ノ現象ヲ見ルベシ。是  
レ即チ、電氣ノ起コレルナリ。

※ 梳  
電氣ニ、陰陽二種ノ作用アリ。陰ハ陽ヲ  
引き、陽ハ陰ヲ引きテ、相會スル時、火光ヲ放

排

チ音ヲ發ス。此ノ現象ノ空中ニ起コレル  
 チ雷電トス。即チ甲ノ雲ニ含マレタル陽  
 ノ電氣ガ空氣ヲ排シテ乙ノ雲ニ含マレタ  
 ル陰電氣ト合體セントスルトキニ火花ヲ  
 ハナチ響ヲ發スルナリ。而シテ雲中ノ電  
 氣ガ地上ノト合セントスレバ落雷ス。

電氣ハ人工ニテモ發セシムルヲ得。絹  
 ニテ摩擦ンタル琥珀ニ、蠶屑、羽毛ノ如キ輕  
 キ物ヲ吸ヒ寄スルカアルコトハ二千五百  
 年以前ノ希臘ノ學者ニモ知ラレタリシガ

\*

\*

ソレヲ電氣ト名ヅケシハ英國王ノ侍醫某  
 ニシテ今日ヨリ凡ソ三百年前ノコトナリ  
 キ。某ハ琥珀ノミナラズ、硫黃、玻璃、蠟ノ如  
 キモノモ、毛布、絹布、又ハ猫皮ニテ摩擦スレ  
 バ、同様ノ力ヲ生ズル由ヲ發見シキ。

近頃ニ至リテハ、藥液ト、鑛物トノ化學作  
 用ニヨリテ、電氣ヲ發セシムル工夫出來タ  
 リ。電信機ハ、之レヲ應用シタルモノニ外  
 ナラズ。電氣燈、電氣鐵道、其ノ他、諸工場等  
 ニ用フル電氣ハ、水力、蒸氣力等ニヨリテ、發

セシムルヲ常トス。

電氣ハ、諸種ノ藝術上ニモ應用セラレテ  
世ヲ益スルコト、甚ダ大ナリ。十九世紀ノ  
文明ハ、半バ電氣ノ賜ナリ、トモ云フベシ。

### 第五課　　もし火の歌

闇を照らす

もし火なくば、人の世は、  
いかに、さびしく、つらからん。  
神世のむかし、焚きし火は、

※

行燈

※

是れ、燈火の始めにて、

魚の油や、種油、

菊燈臺や、燈籠や、

行燈時代と、年を経て、

蠟燭の火を、最上と

思ひし頃も、過ぎ去れば、

西の國より、渡り來し、

ランプに、優るあかりなし。

かくて、尚ほ、

足れり、とはせぬ人ごころ、

上には上の新工夫、

瓦斯燈はやる世となれば、

ランプすてられ、皆人の

瓦斯燈ほむる程もなく、

見る目まばゆき電氣燈、

四方百間、二百間、

四千燭光、五千燭、

一度に輝く其の様は、

大小の星、一ときに、

降り下りたる如くなり。

しかはあれど、

はてなく進む人の智慧、

これにも飽かぬ時の來ば、

大日輪も引き寄せん、

大月輪も引き寄せん、

闇を、萬里に退けて、

夜なき世ともなしぬべし。

第六課 洪水奇談

むかし、獨逸のライン河の岸邊の村に、

※ ※

附註

※

※

ラウンと云ふ、正直な農夫があつた。親子夫婦五人ぐらしで、安樂に、年月を送つてゐた。ち、或年、思ひがけなくも、ライン河が溢れて、そら、洪水よ。と云ふ間もなく、どーく、と寄する水、寢臺を浸し、棚に届き、天井に着く。全くの、寢耳に水の夜中の出来事、家財、道具どころか、子供だけ、や、と助けて、裏手の岡に這ひ上。たが、悲しや、搖籃の中にねかして置いた、末のみどり子を残してきた。夫婦は、狂氣の様になつて、もだへたが、今更、どうもな

揺籃

水

\*

らぬ。それに、飼犬のボチも見えぬ。此の村から、二三十里下手に、ケルンと云ふ町がある。その邊は、川幅廣く、水もひどくは溢れぬゆゑ、土地の者は岸に立て、水の勢を眺めて居た。すると、家が流れて来る、道具が流れて来る、人畜の死骸が流れて来る。やがて、搖籃が一つ、それに、一足の犬がついて、流れく、泳いで来る。人々、不思議がつて、いろく工夫して、や、と引きとめて、岸へあげて見ると、中には、まだ、生れて半年も

死骸

た、ぬ男の兒がはいってゐた。  
しかもすやくと眠つたまゝ  
で。

見物人の中に、葡萄酒問屋  
の夫婦が居た。つい、二週間  
程前に、嘗歳のひとり子を亡  
くした、其の妻女は、急ぎ、其の  
兒を抱き取つて、乳房を含ませ  
た。すると、無邪氣に、乳を吸  
ひ、又快げに、すやくと寝入



※

る。是れを見ては、かはゆくて、手放されず、  
そのまゝ、家へ連れ歸つて、死んだ子の名をそ  
のまゝ、ダニールとつけて、手の中の玉と育  
てた。そして、彼の犬も、そこに飼はれたが、  
ダニールとは、大の仲好しであつた。

ダニールは、生長するにつれて、伶俐で、學  
問も、人に優れ、十二三の頃には、もう、折々、父  
の代理を勤めた。さて、此の家は、運がよく、  
取引も、次第に手廣くなり、ライン河通ひの  
小蒸汽をさへ、買ひ入るゝ程になつた。そ



の發着所へは、ダニールが時々父の代理となつて出かける。

或日、發着所に着いた船の中に、一人の老人が、いつまでも残つて居る。なぜ、上陸せぬか。と、ダニールが聞くと、此の邊は、宿料が高いつゆゑ、不自由ながら、船に宿る積り、といふ。見れば、貧しさうな、田舎の老人、氣の毒に思つて、持ち合せの葡萄酒をやると、老人は、厚く禮をいひ、嬉しげに飲みかけた。

此の時、ダニールの跡を追うて來た例の

吠 犬

犬は、じつと、此の老人の顔を見つめて居たが、忽ち、嬉しげに吠えかゝつて、其の肩に飛びついたり、頸を舐めたりする。だしぬけゆゑ、老人も、一時は驚いたが、おー、ポチか、ポチであつたか。と云ふと、犬は、尾をふりたてゝ、益々叫ぶ。ダニールは、あきれて、どうした譯かと、老人に聞くと、老人は、涙ながら、十三年前の洪水の悲しい話をした。

老人も、ダニールも、まだ心つかねど、ポチが、二人の間を往たり戻たりして、別れよう

としても、別れさせぬゆゑ、ダニールは、とう／＼、その老人を連れて、家に歸つた。

家では、妙なお客を連れて來た、と思つて、譯を尋ねると、ダニールは、今の話をした。葡萄酒商夫婦は、早速、老人を、一間へ招いて、履歴を聞けば、どうやら、ダニールの實父らしい。そこで、ダニールを救ひ上げた一部始終を話すと、老人は、夢かとはかり驚き、嬉しさに、涙にむせぶ。ダニールも、始めて、生みの父にあうて、嬉しく、なつかしく、取りすが

履歴

※ ※

兄弟

り、抱きあうて、暫くは、物も云へなんだ。

それから、改めて、ダニールは、此の家の養子となり、二三日、暇を貰つて、故郷の母や、兄弟に逢ひに行く事になる。家へ行つて、親子兄弟が、驚き喜ぶその心持は、どんなであつたか。恐らく、家内七人の嬉し泣きの涙が、小さい洪水を起こす程であつたらう。

# 第七課 犬の教練

犬に、藝を教ふるは、興味ある事なり。鳥

獸を驅り出さしむるも、車を引かしむるも、藝の中なれど、さる實用上の藝には限らず、何事にもあれ、教練を與ふるは、皆面白し。

犬を教ふるに當りて、肝要なるは、犬の友達となる心がけなり。即ち慈悲と忍耐とを旨として、教練に従ふべし。或は愛撫し、或は叱り、いろくにあやなして、教へ馴らすべし。おだてる事も、一の秘訣なり。

獵犬としての藝の初段は、咬へ方、忍びて、及び、飛び方などなり。これほどを教へこ

咬 秘訣 犬

めば、通常の獵犬たるの用はなすべし。

咬へ方を教ふるには、先づ、犬の前に立ち、幾度となく、物を投ずべし。やがては、それを咬ふることとなる。されど、咬へて、自儘に、よそへ持ち行かば、獵の用に立たざれば、持ち來る癖をつくる爲めに、遠く退きて、菓子などを見せて、我が方へ、犬を呼ぶなり。始めは、咬へたる物を、捨ておきて、來れど、終には、咬へたるまゝにて、來るべし。

次に教ふべきは、水中の物を拾はしむる

事なり。教ふる人は、自ら、沼川の浅みに入りて、犬を呼び、其の入り来るを見れば、漸次に、深みへ誘ふべし。かくして、泳ぐ事に慣れしめし、のち、陸に居て、水中に物を投ずべし。陸上にて、教へられしと同理なれば、犬は、直ちに水に入りて、咬へ来るなり。但し、始めは、水に浮かぶべきもの、即ち木片などを選ぶべし。次には、其の木片に、絲を付け、絲の端に、石などを結び附けて、水に投ずべし。さすれば、木片は、水面と水底との中間に、漂

※探

潜

ふべければ、犬の泳ぎ探す時、其の足に觸るることあるべき故に、馴るれば、たやすく咬へ来るべし。之れを卒業すれば、水底に潜り入りても、咬へ来るに至る。

邪魔

喰

「咬へ方」に次ぎて、獵犬に必要なは、待て、忍びての二藝なり。犬は、獵に出でたる時、小鳥など見つければ、喜んで追ひ廻るものなり。こは、獵の爲めには、却りて邪魔なり。されば、待て、忍びてを教へざるべからず。先づ、犬に、菓子と與へて、喰はんとすれば、屢

待てといひて、叱り止め程經て、宜しと言ひて、喰はしむるなり。忍びても、殆ど、之れと同じけれど、制するに、言葉を用ひず、犬の頭又は脊をおさへて、制するのみ。或は、手をひろげて、忍べと命ずるなり。平生、之れを行はしむるは、割合に易けれど、肝腎なる獵に臨みて、斯くさするは、むづかし。

「飛び方を教ふるには、狭き道などに、犬のたけ程の高さに、杖又は棒を横へて、犬と反對なる方に立ちて、菓子を示すなり。犬は、

菓子を獲んとして、飛び越え来る。次第に、その杖の高さを加へて、教へ馴らすべし。

# 第八課 耳

啞 米 塞

發音ノ力、不十分ニシテ、物言フ能ハザルヲ、啞トイフ。舌ノ不具ナルガ爲メニ、啞トナレル人モアレド、大方ハ、耳ノ聞コエ又爲メニ、啞トナル。物言フコトヲ教ヘラル、道、塞ガレバナリ。

耳ナクバ、智識ヲ得ルニ困難ナルコト、殆

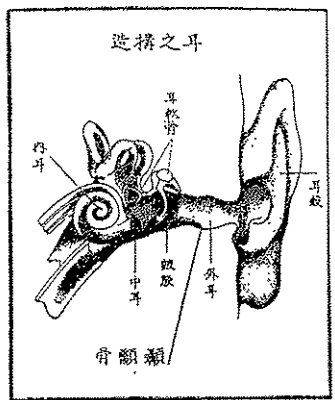
※ ※ ※ 膜 ※

ド、目ナキニモ等シカルベシ。耳ハ、大切ノ感覺器ニシテ、貴キコト、目ニ次グ。目ノコトハ、後チニシテ、先ヅ耳ノ構造ヲ語ラン。

耳ハ、内耳、中耳、外耳ノ三室ニ分カレタリ。通例、目ニ觸ル、部分ヲバ、耳殻トイフ、外耳ノ一部ナリ。外耳ト中耳トノ間ニ、薄キ膜アリ、大鼓ノ皮ニ似タル故ニ、鼓膜ト名ヅク。サテ、中耳ニハ、通常ノ空氣充チタルガ、ソコニ、管アリテ、始終、咽頭ト交通ス。又、小サキ軟骨、相繋ガリテ、内耳ニ接ス。内耳ノ構造

※ ※ ※ 複雜 ※

喇叭



ハ、最モ複雜ニシテ、中ニハ、液體アリ、神經ハ、ソノ内面ニ分布セリ。耳ノ構造ヲ、物ニ喩フレバ、ホ、電話機ノ如シ。喇叭ニ似タル

外耳ハ、發信ノ時ニ、語ヲ言ヒ入ル、口ニ比スベク、鼓膜ハ、薄キ鐵板ニ比スベク、中耳、内耳ノ諸機關ハ、大ナル差異ハアレド、大體ノ模様ハ、發電機ノ裝置ニ比スベク、内耳ヨリ、

腦ニ通ジタル神經ハ、電線ニ比スベシ。

耳ハ、大切ナル機關ナレバ、自然ノ保護、嚴密ニ行届ケリ。先ヅ、耳殻ノ他ハ、スベテ顚顚骨ト名ヅクル、堅固ナル骨ノ中ニ藏メラレテ、アラユル外來ノ危害ヲ避ケ、外耳ハ、マタ、自然ニ、一種ノ惡臭アル液ヲ分泌シ、以テ、昆蟲ナドノ入ルヲ防グ。自然ノ裝置ノ巧妙ナルヲ見ルベシ。

### 第九課 盲啞學校（上）

久しく、臺灣へ出稼ぎしてゐた或大工の娘に、今年、やうく十一になる、お徳といふ少女があつた。生れつきの啞ゆゑ、教育もせず、に棄てゝおけば、一生廢人となり果つべきであつたを、出入先の或少將の夫人が、不便が、大工の留主中に、盲啞學校へ入れて、教育を受けさせた。

かたはの子ほど、一しほ不便に思ふは、親心の常、父の大工は、海山千里を隔てた臺灣にゐる間、夜に晝に、娘のことを思ひださぬ

草鞋

休  
閑  
玄  
關

\*

ことはなかつた。然るに、今度、様子あって、一應、本土へたち歸つたので、草鞋がけのまゝ、先づ、恩人の少將を尋ね、其の足で、すぐ、盲啞學校へいった。大工は、盲啞學校とは、どうした學校か、無學ゆゑ、委しくは知らぬのであった。學校は、丁度、休憩時間で、玄關前には、男女の生徒が、集つて、遊んで居たが、盲生徒の外は、一人も、口をきくものがない。どれもく、手真似ばかり、笑ふばかり、うなづくばかり。あゝ、此の子たちも、皆、お徳同様のかたはか、

\*

\*

會  
釋

\*

と思へば、もう、大工の胸は、一ぱいになった。さて、受付に、來意を通ずると、やがて、書記らしい人が出て來て、應接所に案内し、暫く、お待ちなさい、と言って出ていった。程なく、洋服を着けた教師が、お徳をつれて、はい、て來て、會釋して、椅子についた。お徳は、洗濯物ながら、さ、ばりした物を着て、見違へるほどに、成長して居た。

大工は、嬉しさに、胸が一ぱいになって、お徳の顔を見つめたまゝ、物も言ひ得ない。やゝ



※ ※ ※  
とのことで、教師に向つて、何の因果で、こんな  
かたはに生れましたか。久しぶりに遇つた  
父に、た。た一言も言へぬとは。と言ひさして、  
聲を曇らせた。教師は、不審さうに、では、お  
前さんは、この子が、物を言ふ様になつたこと  
を御存じないか。と言ふ。じ。ーだんおっし。っ  
てはいけませぬ。啞が、物をいふ筈はあり  
ませぬ。と、大工は、目をみはつた。いや、そ  
れが、教育の力。と言ひながら、教師は、お徳に  
向ひ、徐かに、この方は、どなた。答へてこら

※ ※ ※  
ん。と命じた。思ひがけない、お徳は、口を開  
いて、私のおと。様です。と答へた。

聲の調子は、安らかではなかつたけれど、と  
もかくも、明かに言つたには、相違ない。父の  
大工は、び。くりして、若しや、外の子が、どこか  
にゐて、言つたのではないかと疑つて、思はず、あ  
ちこちを見廻はした。

第十課 盲啞學校(下)

啞が、手眞似で、意を通ずるのは、見も聞き

もしたが、物を言ふのを聞いたは、今が初めてゆゑ、父の大工は、非常に驚いた。

少將の夫人の情けで、留主中にお徳が、此の學校へ入れられ、養育をうけてゐることは、知つてゐたが、衣食させて貰ふだけとは思つてゐたゆゑ、物をいふ様になつたとは、夢さう、思ひ誤けなんだ。教師の説明で、だんだん、盲啞學校の趣意がわかるにつれて、大工は、驚き喜んで、躍りあがる程であつた。

まだ、口では、複雑なことはいへねど、筆談

\*

なら、どんな事でも話し、算術、讀書、圖畫、手工、裁縫等も、習ひ覚え、剩へ、開校以來の優等生と聞いて、父は、嬉し泣きに、泣き出した。

教師は、尚ほ、十分に會得させる爲めに、大工を案内して、教場の様子を見せた。

階下は、啞生の教室で、二階は、盲生の教室である。盲生は、點字盤といふもので、文字を習ふ。盲生は、啞と違つて、耳が働くゆゑ、音楽をも修め、又、鍼治、按摩などの技藝をも習ふ。國語、算術、其の他、種々の學課は例の如

\*

鍼治  
按摩

※ 喧嘩 老練



くである。體操もある。  
 啞生の一年生を教ふるのは、  
 女教師である。耳と口とこそ、  
 用をなさね、啞生は、目が見える  
 ゆゑ、盲人よりも、わんばくで、喧  
 嘩をする、ふざける、始末にゆか  
 ぬ。されど、教師は、氣長に教訓  
 し、教授する。老練なものであ  
 る。

先づ、發音を教へるには、黑板

※ ※ ※

の側に、鏡があつて、生徒を、一人一つ、そこに立  
 たせて、教師自身の口の動き、工合を示して、  
 同様に、口を動かし、音を出させるのが、始ま  
 り。教師は、骨の折れることであらうが、其  
 の勞苦は、無駄にはならぬ。現に、昨年の卒  
 業式にも、啞生が、立派な演説をした、といふ。  
 大工は、これを見て、お徳も、亦た、かうして、  
 教育をうけたのか。と感心し、校長にも面會  
 して、禮を述べ、せめての感謝のしるしにと、  
 自分が、海外で、稼ぎ溜めた貯金の、幾分かを、

學校に寄附して、歸った。

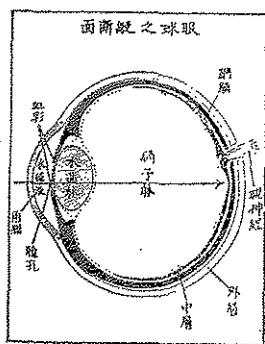
# 第十一課 目

人體ノ諸機關ハ、皆、精妙ニ構造セラレタ  
レドモ、取リワケテ、精妙ナルハ、目ナリ。  
目ノ、最モ大切ナル部分ハ、眼球ナリ。眼  
球ハ、主トシテ、三様ノ透明質ト三重ノ膜ヨ  
リ成ル。膜ノ最モ上ツラナルハ、硬キ膜ニ  
テ、其ノ前面ニ見エタル白キ部分ヲバ、俗ニ  
白目ト云フ。眼球ノ正面ニ顯レタル硬キ

被 ※ ※

※

膜ノ透明ナル所ヲ、角膜ト云フ其ノ形時計  
ノ硝子蓋ノ如シ。眼球ヲ保護シ、且ツ、光線  
ヲ透過セシムルコトヲ司ル。



角膜ト、水晶體トノ間  
ニ、膜アリ、虹彩ト稱ス。  
俗ニ謂フ黒目、是レナリ。  
人種ニヨリテ、眼ノ色異

ナルハ、虹彩ノ色ノ異ナルナリ。

瞳孔

虹彩ノ中央ニアルモノヲ、瞳孔トイフ。  
瞳孔ハ、虹彩ノ張り又ハ縮ムニツレテ、大サ

賣

「ワタシ」

二十六 一

※ ヲ變ジ、光線ノ度ヲ調節ス。猫ノ眼ノ絶エ  
 ※ ズ變化スルハ、此ノ作用ニ基クナリ。  
 ※ 三重ノ膜ノ中、最モ内方ニアルヲ網膜ト  
 ※ イフ。視神經ノ末梢、之レニ密布セリ。  
 ※ 透明質中ノ水晶體ハ、凸鏡ニ似タリ。ソ  
 ※ ノ前ニ、水様液アリ、後方ニハ、硝子體アリ、相  
 ※ 助ケテ、光線屈折ノ作用ヲナス。  
 ※ 眼ノ總體ノ構造ハ、寫眞術ニ用フル暗箱  
 ※ ニ比スベシ。水晶體ガ、凸鏡ニ似タル外ニ、  
 ※ 網膜ノ種板ニ似タルアリ。

※ 又、目ノ作用ハ、寫眞術ニ比スベシ。其ノ  
 手順、左ノ如シ。外物ヨリ、光線ヲ發射スレ  
 バ、水晶體、之レヲ屈折シテ、之レヲ網膜ノ上  
 ニ集メ、ヤガテ、ソコニ、其ノ物ノ像ヲ結ブ。  
 視神經ハ、此ノ刺戟ヲ、腦ニ傳フルノ作用ヲ  
 ナスモノナリ。

眼ニ附屬セルモノニテ、大切ナラヌハナ  
 シ。瞼ハ、開閉ヲ司リ、睫毛、眉毛ハ、塵埃等ノ  
 入ルヲ防グ。マタ、涙ハ、塵埃ヲ洗ヒ去リ、且  
 ツ、眼球ノ運動ヲ、圓滑ナラシム。

第十二課 世界周遊（三）

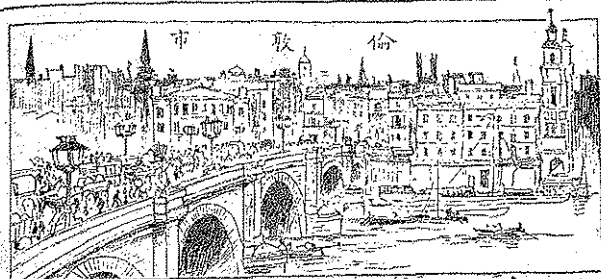
闘牛

合衆國の紐育より大西洋を航して、歐羅巴の葡萄牙に着し、其の首府リスボンより汽車に乗りて、西班牙に赴く。葡、西兩國には、闘牛盛んに行はる。西班牙人は、頭髮黒くして、東洋人に似たり。この國、中世紀には、盛んなりしが、今は衰へたり。汽車は、ピレニース山脈を超えて、佛蘭西に入る。この邊には、十數里に亘れる葡萄

豪奢

園あり。數日にして、馬耳塞に着す。馬耳塞は、地中海の北岸にあり。歐洲大陸の旅客は、一たび、こゝに集るを通例とす。こゝより、十三時間にして、汽車、巴里に着す。巴里は、世界第一の豪奢の都會なり。歐洲に遊ぶものは、巴里を見ざるを恥とする程なり。公園などの宏壯、美麗は、言ふに及ばず、音樂堂、美術館、博物館、劇場等、いづれも人の目を驚かす。里昂の市に立ち寄りて、絹布製造所を一覽し、カレイに出で、ドーバ

倫敦市 橋樑



―海峡を越えて、英國倫敦に  
 赴く。  
 倫敦の中央に、特に一區あり、古倫敦と呼べり、我が東京の日本橋區にも比すべし。一切の商業機關は、區内に具はりて、繁華、熱鬧を極む。市中には、銀行、會社、商店のみ鱗次す。實に、英國の富の樞軸とも稱すべし。

\*

\*

製造業に名高きグラスゴー附近に出づれば、林立せる烟突、黒煙を吐きて、晝も小暗し。主なるは、製鐵業、造船業等なり。ニ。カッスルのアームストロング會社の如きは、製砲所の最大なるものにて、工場は、五階造なるが、昇降機にて、上下し、高さ數丈の釜を並べて、鐵材を鍛かす。職工二萬人以上を使役す。

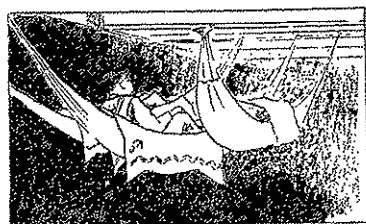
英國にては、蒸汽機關、荷揚機械、瓦斯管を始め、鍋、釜、鐵錘等に至るまで、一々、製造所を

異にす。木綿と麻とは、織場を別にして、織り出だす。分業の進めること、世界第一と稱す。

英國には、株式組織の會社少なし、多くは一人の資産を元として、獨立の業務を營む。但し、合名會社の組織に成るものも多し。是れ、英國工業家の、資産に富める證據なり。

### 第十三課 海軍兵の生活

前略。御約束に任せ、新生活の模様申

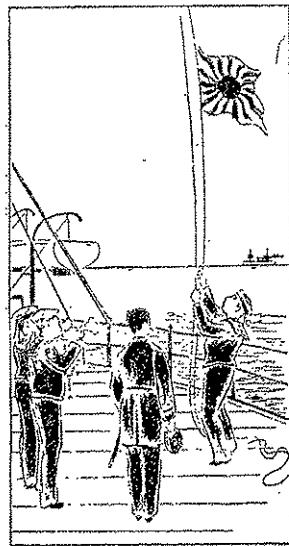


上候。はじめは、心もとなく存じ候生活も、おひく慣れ候て、楽しく相なり候。先づ、朝は、まだ薄暗きに、甲板掛りの士官、大聲にて、起きろと命令いたし候。それを聞くと同時に、一同釣床を離れ、起き出でて、上甲板を洗ひ候。かくて、朝飯濟めば、平服に着かへ、木具、金具などを磨き、或は、中下の甲板を拭ふが、定めに候。午前八時には、軍



掲

艦旗を掲ぐる式あり、一同、恭しく、軍旗に



對して、敬禮をいたし候。つゞいて、軍器の點檢あり。それより、各自、分相應の操練に従事致し候。

分操練

晝食後は、一時間休憩いたし、やがて、午後の操練に取りかかり候。

かくて、夕食となり、一同、また、食堂に集

※

吊

※

※

り、夕食済みて、夜服に着換へ、朝同様、再び軍器の點檢を受け候。日没後に、軍旗を取りおろす式を行うて後ちは、もはや、別段の用はなく、たゞ、釣床を吊ると、眠に就くとのみに候。

通常の日課は、概略、右の如くに候へど、遠洋航海中には、随分壯快の事も多く候。就中、大うなばらの真中にて、日の出、月の出等を眺め候は、まづ、陸上にて、經驗し難き愉快かと存じ候。印度洋あたりにて、

※

舊知

暑さ酷しき晝を過として、夜になり、波は静まり、風は涼しく吹きよする時分に、舷に立ちて、波間を出づる、銀の如き明月に向ふ心地などは、到底言ふべからず候。或は、檣が、林の木のように群れる、世界有数の大港に寄港いたし、或は、未開地に立ち寄りて、珍しき人種に接し、或は、熱帯又は寒帯にて、奇異なる動植物を見、又は捕へ、或は、始めて遇ひし外國水兵と、一見舊知の如くに、ボートレースの壯遊を演じ、

同肥

※

※

※

或は、思ひがけなくも、異境にて、同胞に逢ひ、共に、昔を語る、樂しさなどは、皆、海軍生活の賜と申すべく候。常は、小さき軍艦を、唯一の世界といたし居り候へども、いざとなれば、大洋を、庭池ほどに心得ての生活は、又とあるまじく存じ候。

すべて、兵役に服するは、國民一般の義務にて、其の任務の容易ならぬこと勿論に候へど、殊に、近來は、海軍力の、國勢に及ぼす影響、愈々重大に候ゆゑ、小生等の任務

不覺  
小閑

一層重大と心得候。事に臨みて、決して  
不覺の振舞は致すまじく候間、何卒御休  
意下さるべく候。先は、小閑にまかせて、  
概況御通信申上候。敬具。

月 日

軍艦朝日にて

大島健一

第十四課 大海原の歌

大いなる哉、大海原。

朝に夕に、どーくと、

＊ ＊ ＊ ＊

動き轟き、たえ間なく、

大浪、小浪寄せ、返る。

いつこに、打たぬ浪を見ん。

いつ、浪の音を聞かざらん。

大いなる哉、大海原、

幾千萬里、幾ちひろ。

世界の山々、ことごとく

崩しても、海はうまるまじ。

世界の川々、残りなく

注げども、海は溢れぬよ。

大いなる哉、大海原。

東、西、南、北、萬隻の

船通へども、跡とめず、

幾億年間、赫々の

日は照らせども、水涸れで、

むかしながらの瑠璃の色。

長閑けき様は、海にあり。

風なぎはてし春の沖に、

朧にうつる月見れば、

あらぶる心もなぎぬべし。

長閑

※

※

※

※

※

※

※

※

松島かげの朝ぼらけ、

蓬萊山も、よそならず。

懐じさも、また海にあり。

春秋二季の大あれに、

はやて起つて、浪立てば、

甲鐵艦も、木の葉とたゞよひ、

大高じ煙の逆巻けば、

村々流れて、跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、

國興亡し、人變り、

賣

大

「日本書紀」

三十四

「日本書紀」

開闢

陸には、古今の別あれど、

海原のみは、開闢の

昔のすがたそのまゝに、

動き、轟き、寄せ、返る。

第十五課 文天祥

むかし、支那宋朝の権力衰へし頃、元、大舉して、來り攻む。宋の皇帝、詔を發して、防禦の兵を募りしに、一人も、來り應ずるもの無かりき。

料

壯丁

搏

\*

\*

文天祥といふ、忠烈の豪傑あり、慨然として奮起し、自ら、郡中の壯丁を聚め、一小隊を組織して、召に應ぜんとす。その友、留めて曰はく、群羊の、猛虎を搏たんとするに等し。危しと。天祥曰はく、我れ、之れを知らざらんや。たゞ、宋朝の、民を撫育すること、茲に三百年に餘れるに、一旦、急ありて、兵を徵すに及び、一人の應ずる者なきこと、憤慨に堪へず。獨り、國難に殉はんとするのみ。或は、我が風を聞いて、起つ者あらんと。

※

傳  
國璽

※  
米

※

かくて、文天祥は、屢、宋朝の爲めに獻策して、元と戦ひ、功を建つること少からざりしが、帝の傳、變心し、國璽を抱きて、元に降るに及び、敵將伯顔、宋の執政に面議せんことを求む。天祥、執政に代りて、敵陣に赴き、伯顔と論議し、正義を主張して、一步をも譲らず。伯顔大いに怒り、天祥を縛して、元に送り、ついで、臨安城に攻め入り、皇帝、皇后を擒にして、凱旋しき。

時に、理宗帝の孫益王、廣王、浙江といふ處

恢復

※

※

惡疫

※

にあり、元の兵、頻りに之れを追求す。天祥、此の二王を奉じて、恢復の謀を運らさんと欲し、潜かに、敵中を遁れ出でて、眞州に赴き、遂に、福州にて、益王に謁し、自ら、樞密使となり、敗餘の兵を集めて、後舉を企てしが、不幸にして、惡疫流行し、天祥の母も死し、長子も亦た死す。されど、天祥は、屈せずして、屢、元兵と戦ひしが、遂に、復た捕へられき。獄に下りても、天祥は、其の志を變ぜず、名高き、正氣の歌を作りて、自ら勵ましき。

諸  
本  
馬  
斗  
上  
走  
月  
本  
二  
三  
七  
馬  
斗  
上  
走  
月  
本  
二  
三  
七

宰相

元主懇に諭して、歸服せしめんとすれども、聽かず。曰はく、我れは宋の宰相なり。いかで、二朝に事へん。願はくは、直ちに、我れ

忠孝

文天祥真筆縮寫

を殺せ。と。元主遂に天祥を死刑に處しき。

天祥、刑に臨みて、

從容

神色自若、南に向ひて、再拜し、從容として、殺されき。元主歎稱し、天祥は、眞の男子なり。我が將相、及ぶものなし。と、深く惜みけり。

第十六課 看護の心得

病氣に罹れる際に、缺くべからざるもの三あり。一は醫師、二は藥劑、三は看護なり。此の三つのものは、皆、大切なり。何れを、輕しとも、何れを、重しとも、定めがたし。

さはいへど、始終、病人の傍にありて、食事、服藥、一切の世話をなす者が、不注意ならば、良醫も、良藥も、無効となる次第なれば、看護者の人柄は、先づ、第一に擇ばざるべからず。

※

※

※

資格

清潔とは、室内の拭き掃除より始めて、器具、物品を洗ひ淨むること、室内の空氣を新鮮ならしむること、患者の身に纏へる物を着換へさせ、洗濯するること、其の他、一切の

淨

洗滌

※

※

不潔を掃除し、洗滌することを指す。

静穩とは、戸障子の開閉を、物靜かになすこと、起居進退を、しとやかになすこと、大聲にて談話せぬこと、口數多くきかぬこと等、すべて、患者の神經を激せしむる様の言語、舉動を慎むことを言ふ。

其の他、綿密といひ、溫和といひ、懇切といふ、何れも、患者の爲めを思うて、其の心持を、そこなはぬ様、其の病勢を募らしめぬ様、油斷なく注意する心がけに外ならず。殊に、



無聊  
慰藉

病重き時は、始終、患者の容體に注意し、些少なる變動をも、醫師に知らする必要あり。是れ、綿密といふ資格の大切なる所以なり。病氣稍快方に赴けば、患者は、漸く、無聊に苦み、何等かの慰藉を求むること、自然の結果なり。此の際、看護者不注意なるか、若しくは、看護法に不慣れなるときは、往々にして、病復た、後戻りすることあり。例へば、退屈を慰めんとして、間食を與へ、又は、多く、感情を刺戟すべき談話をなすなどは、最も忌むべきなり。花卉又は美術品などを見するは、善し、されど、最も宜しきは、淡泊にして、愉快なる浮世話などなり。

淡泊

前に挙げたる五個條のうち、主要なるは、懇切といふことなり。懇切ならば、綿密なるべく、又溫和なるべく、又靜穩なるべく、又清潔なるべし。但し、所謂懇切は、誠意より出でざるべからず。是れ、人情の厚からんことを、看護者に、最要とする所以なり。

※

前の五個條を生れながらに具ふるは、通

例、男子よりも、女子に多し。女子は、天成的看護者とも稱すべし。中にも賢き母と妻とは、最良の看護者なり。

### 第十七課 ばくてりや

病氣ハ、ばくてりやノ寄生ニ因リテ、發スルモノ、甚ダ多シ。内臓ノ病ノ如キ、殊ニ、然リトナス。

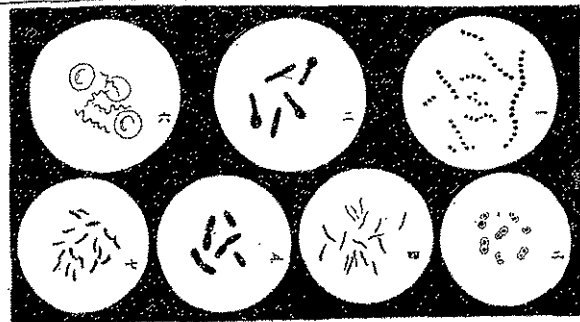
ばくてりやハ、最モ下等ナル植物體ニシテ、肉眼ニテハ、見難キホド極小ナリ。通例、

球菌類、桿菌類、螺旋菌類、及ビ不定形分裂菌類ノ四種ニ分カツ。

球菌類ハ、肺炎ノ因トナリ、化膿ノ因トナル。桿菌類ハ、菌ニヨリテ、ソレノニ、結核、ベすと、破傷風、腸室扶斯等ノ因トナル。螺旋菌類ハ、これら又ハ再歸熱ノ因トナル。不定形分裂菌ハ、水道ノ管内ニ繁殖シ、人躰ニ入ルニ及ビテ、種々ノ病ヲ醸ス。病症ニハ、定マリナシ。

此等ノ毒菌ハ、主トシテ、不潔ノ場所ニ生

一 遊飛ス  
二 腐敗物ニ宿リ或ハ空中ニ  
三 破傷風菌  
四 結核菌  
五 スチリ  
六 赤痢菌  
七 コレラ菌  
一以 千上 倍増



ズ。或ハ濕地ニ生ジ或ハ腐敗物ニ宿リ或ハ空中ニ遊飛ス。  
ばくてりやハ通例腐敗物ヲ食シテ生活シ一定ノ溫度ヲ俟チテ活動ス。  
ばくてりやガ人躰ニ侵入スル手順ニ凡ソ三様アリ。飲食物ニ附着シテ腹中ニ入ルハ其ノ一空氣中

\*

ニ遊飛シテ肺ニ入ルハ其ノ二皮肉ノ傷キ破レタル處ヨリ入ルハ其ノ三ナリ。  
ばくてりやノ傳播ハ其ノ繁殖ト同様ニ驚クベク迅速ナリ。或ばくてりやノ如キハ一秒時ニ數萬個ニ増殖ストイフ。  
今ヤ人智大イニ進ミテ如何ナル猛獸毒蛇モ到底人間ニ勝ツ能ハズト雖モ獨リ此ノ極小生物ハ往々ニシテ人ノ命ヲ奪フ。  
是レソノ極微ニシテ視難キトソノ繁殖傳播ノ甚ダ迅速ナルトニ因ル。ばくてりや

讀

本

高等科生物月報

四十二

富山房藏版

ハ、實ニ恐ルベキ、人間ノ大敵ナリ。

ばくてりやハ、カク恐ルベキモノナレバ、常ニ其ノ豫防法ヲ講ゼザルベカラズ。石炭酸、昇汞、石灰等ハ、有効ナル消毒劑ナレバ、不潔ノ場處ニ撒布シテ、害菌ヲ滅ボシ、物ノ腐敗ヲ防グベシ。且ツ、庭園、家屋、衣服、身體等ヲ清潔ニシテ、ばくてりやノ寄生ヲ避クルコトモ、大切ナル用心ナリ。蓋シ、ばくてりやハ、虛弱ナル身軀ニ入りテハ、ソノ毒ヲ逞シウスレドモ、強壯ニシテ、營養盛ンナル

※  
撒布

逞

※  
侵蝕

モノノ軀中ニ入りテハ、繁殖スル能ハズシテ、死滅スルヲ常トス。サレバ、第一ノ豫防法ハ、平生、身軀ヲ強壯ニシテ、其ノ侵蝕ヲ退クルニ在リ。

### 第十八課 赤道直下的一天

汽船に乗りて、赤道直下の大洋にあり、と想へ。

見渡せば、水天相まじはる東の方には、棚引く雲、紫がかれる紅の色を帯び、入り日の

山の景色にも似たり。静けさ、美しさ、名状すべからず。さるほどに、雲は、愈、ゆらめきて、色は、愈、紅となり、寄せ来る波は、一波ごとに、其のうねり、漸く高し。

やがて、太陽は、爛々然として輝き出でたり。都會にては、今頃は、囂々として、熱鬧の始まる時刻なるべけれど、こゝ大海原の真中は、天地、尚ほ眠れる如く静かなり。

何時しかに、雲は、散じたり。波は、漸く高けれども、相激するものもなし。陸地近き

霧々

※ ※

遠

※ ※

重疊

海ならば、鳥も来り、舟も見ゆべけれど、こゝは、一物の、眼を遮るなく、四顧茫々たるのみ。されど、暑さは、一刻毎に迫り来る。

赫々たる太陽は、既に、中空に上りたり。竈より来る如き風は、却りて、暑氣を加ふるのみ。

さる程に、又も、雲出でたり。其の色、灰色にして、其の形、或は、山の如く、或は、獣の如く、人の如く、兎の如く、かなた、こなたに漂ふ。終に、相重疊して、色、爲めに黒ずみ、いつしか、

太陽の全面を覆ふ。

見るうちに、電光閃き、雷轟く。忽にして、雨、沛然として、横さまに降り来る。風吼え、浪怒る。凄まじき景色となる。

歌  
暫くして、強雨歇む。太陽は、既に、中天を過ぎたり。見れば、一隊の魚群、洋面に浮びて、自由に游泳す。常は、三十丈も深く潜むといふ鱗すらも、尾鰭をはたらかせて、出て遊ぶ。新空氣を呼吸するものゝ如し。妨ぐる人もなく、追ふ舟もなければ、悠々た

鰭

悠々

※ 發刺

るもの、發刺たるもの、千狀萬態なり。奇觀いふへからず。涼風もまた来る。

時刻の過ぎ行くにつれて、太陽、將に、波間に沈まんとす。紅の雲は、西の方の水平線を籠め、空も、水も、其の光景を改む。見るうちに、太陽、波間に沈みて、餘光、長く、天の一方を照らし、空や雲や、紅、黄、紫の三色に輝き、洋面に交映し、眩きはかりの壯觀を現す。や、かて、其の光、其の色とも、やうく、水平線下に退けば、太洋の全面、四方より、黒みそめて、

賣

ス

萬葉集上巻月夜

四十四

富山房藏

終に眞黒となり、只涼風に、波音の高きを聞くのみ。

### 第十九課 印度

印度は、亞細亞の一大半島なり。三角形をなして、其の南端に突出し、北緯八度より三十五度までの間にひろがれり。北の境ヒマラヤ山の頂には、四時雪たえず、中部の平野には、果穀、季毎に累々たり。往時、天竺と呼ばれたりしは、此の國なり。

北緯

\*

此の國は、五千年來の古國なり。風に、開明の國として知られ、化を、東西に及ぼしたりき。佛教の始祖釋迦は、此の國に生れしなり。今は、英國の所領たり。

\*

印度孟買の紡織業は、甚だ盛大なり。此の地、木綿の名産地なるがゆゑに、紡績會社、機織工場の廣大なるもの立ち並べり。又、繰綿輸出港としても、世界に知られ、各國の船舶、常に輻湊す。

船海

\*

孟買より、汽車は、中央の高原を走りて、ガ

※ ※

ンジス河畔に出で、首府カルカッタに至る。其の間、幾百里、一望際涯なき廣野に、時ならぬ雪を見ることあるは、罌粟の花の盛なり。之れを鴉片に製して、年々、支那に輸出す。印度の大半は、熱帶に位す。故に、氣候、甚だ熱し。川は、ガンジス、印度、ブラマプートラ等の巨流あり、よく、國內を浸潤す。故に、地味肥沃にして、植物繁茂し、頗る、農業に適せり。産物は、木綿、鴉片の外、米穀、砂糖、茶、烟草、珈琲、香料等を主とす。特に、米の如きは、

※

一年三回收穫す、と云ふ。其の良國土たるを知るべし。

されば、太古より、人民繁殖し、現今、二億六千萬の人口あり。人種は、白人の一種にして、歐洲人と、祖先を同じくす。佛教は、もと、此の國にて起りたるなれど、今は、殆ど、跡を絶ち、只、ヒマラヤ近傍と、錫蘭島の南部とに行はるゝのみ。

今より四百年前、葡萄牙人バスコ・デ・ガマ、印度に、航路を開きしより、同國人、此の國に



住み込みしが、其の後ち、和蘭、佛蘭西、英吉利等の國人、相續ぎて、此の地に來住し、初めは只、貿易に従事せしが、内亂起るに及びて、漸く、政事に干涉し、國家、終に滅亡するに至り、全國、英國の有となれり。その後、土人、獨立を圖り、兵を擧げて叛きしが、團結力とほしかりしかば、忽ち壓伏せられ、再び起つ能はざる有様となりぬ。之れを、印度近世史の大略とす。

壓伏

\*

## 第二十課 リビングストーン(上)

\*\*\*

\*

\*

片田舎の貧少年より、身を起こして、拔群の探検家、非凡の科學者となりし人あり。其の名を、ダビッド・リビングストーンといふ。リビングストーンは、西曆一千八百十七年頃、蘇格蘭の一寒村に生れき。夙に父を喪ひ、十歳の頃より、紡績所に雇はれて、母の家計を助けゝるが、生來、讀書を好みしかば、母も、其の心を察し、家計困難なる中ながら、或は、書籍を購ひて與へ、或は、夜學校に通は

涉獵  
冒險

しめき。

されば、長ずるに随ひて、學力進み、多く、古書を涉獵し、就中、傳記、冒險譚、博物書等を好みたりき。又、實驗と觀察とを愛し、暇さへあれば、野外に出でて、動、植、其の他の天然物を採收し、其の性質を取り調べき。

其の後、日々の賃錢を貯蓄して、學資となし、冬季學校に入りて、藥劑學を學び、兼ねて、神學をも修めたりき。二十三、四歳の頃、亞弗利加より歸りし某宣教師が、黑奴虐待

慘狀

※

の慘狀を語るを聽きて、大いに感慨し、始めて、野蠻を教化せんとの大志を起こし、終に、倫敦傳道會社に就きて、布教、採檢の遠征を、亞弗利加の内地に試みんことを請ひき。

※

※

※

嘉納

當時、亞弗利加は、暗黒世界と呼ばれ、鬼棲む里の如くに思はれたりしが、そこに、身を挺して、遠征を試み、蒙昧殘忍の蠻民を教化せんと志し、は、真に、壯烈と稱すべし。傳道會社、其の請を嘉納しければ、リビンクス・トーンは、直ちに、亞弗利加に向つて、發足し、第

讀

本

萬世科生使用本

四十八

第一卷

一回の探檢に着手せり。

開化の風の吹きも通はざりし處なれば、太陽は、赫々として照らせども、四方は、闇の心地して、初めは、探檢の方針も定まらず、危きことも、屢ありしが、遂に、ゾーガ河を渡り、ガミー湖に出で、そこに、リビングストンは、第一回の調査を遂げ、亞弗利加内地の事情を、文明世界に紹介せり。

次に、準備を改めて、更に、探檢を企て、此度は、ゾーガ河より、北進すること二百哩、一大

該地

鹽湖に達し、更に、西北に進みて、コープ河を渡り、遂に、リンヤンテといふ處に達しぬ。かくて、暫らくは、該地に滞在し、風土、人情を調べ、且つ、多く、科學上の好材料を得て、クルーマンに歸りぬ。

此の時、途中にて、獅子にかまれし傷、痛みを生じ、加ふるに、病にも罹りければ、止むなく、ケープタウンに赴きて、妻子を歸國せしめ、自らは、留まりて、病を養ひぬ。

かくて、病の癒ゆるを待ちて、再び、更に深

＊齋

く内地に入り、遂に大陸の西岸に出で、種々有益なる報告を齎して、一先づ本國に引き返しぬ。

第二十一課 リビングストーン(下)

＊

＊

瘴氣  
飢餓

光陰、走るが如く、リビングストーンが、始めて、亞弗利加に入りてより、既に十六年を経たりけり。其の間、或は蕃人に襲はれ、或は瘴氣に侵され、或は飢餓に迫り、或は猛獸、毒蟲の害に逢ふなど、千辛萬苦、一々詳記し

＊

拔萃

て、彼れが、自筆の紀行にあり。今、其の一節を拔萃せん。

＊

＊

予

くるゝまんへ歸ル途中、トアル村落ニ滞在セシガ、此ノ邊ハ、白晝モ、獅子ノ横行シテ、人畜ヲ害フコト、屢アリ。取リワケテ、月夜ハ、危険ナリ。

或日、土人ト共ニ、獅子狩ヲ催シ、ニ土人、獅子ニハ、鹽アリトテ、恐レテ、進マズ。予ハ、之レヲ勵マシツ、先ニ立チテ進ミシニ、忽チ、一頭ノ獅子アリテ、カナタノ巖

言  
ノ  
一  
富山房藏版

蹠 跳 懷 狙 睨蹠

上ニ蹲リ、眼ヲ光ラセツ、コナタヲ睨ミ  
居タリ。予ハ銃ノ狙ヒヲ定メテ、發射シ  
ヌ。獅子ハ怒レル面色、悽シク、天地モ動  
ク程ニ吠エ猛リテ、巖頭ヨリ、跳リ下リヌ。  
獅子ハ、予ガ肩ニ噬ミツキテ、猫ノ鼠ヲ  
弄フ如クニ、予ヲ振リヌ。此ノ一フリニ  
眼眩ミ、夢見ル如ク、醉ヘル如ク、苦痛モ、恐  
怖モ、知ラズナリヌ。譬ヘバ、麻藥ヲ用ヒ  
ラレシ患者ガ、手術ノ床ニ横ハレルガ如  
シ。此ノトタンニ、土人モ亦タ、發射ス。

※ ※

獅子ハ、予ヲ捨テ、土人ニ跳リカ、リ、其  
ノ股ニ噬ミツキヌ。居合セタル一人、槍  
ヲ向ケシカバ、獅子ハ、又、其ノ肩ニ噬ミツ  
キヌ。此ノ猛獸ノ、死物狂ヒニ猛リ狂フ  
様、恐ロシトイフモ、愚カナリ。サレド、終  
一數箇所ノ痛手ニ得堪ヘデ、其ノ瘍ニ斃  
レタリ。  
余ガ肩ニハ、數箇所ノ齒痕ヲ止メタリ。  
サレド、健康ヲ害フニハ至ラリザリキ。  
云々。

賣  
本  
富山房藏版  
五十一

リベングストンは、再び、亞弗利加に旅行して、歸國し、英吉利女王より、探檢地の領事を命ぜらるゝに及びて、更に、三たび、亞弗利加の内地に入りぬ。さて、コンゴ河の上流を探り、タンガニーカ湖畔に近づきし頃、或は、糧食を缺き、種々の艱難に出遭ひ、身殆ど死なんとせしが、有名なるスタンレーの來り援ふに會うて、勇氣百倍し、更に、北進して、ナイルの河源をも探らんとせり。かくて、種々の危難を冒し、幾多重要なる



發見をなし、が不幸にして、赤痢に侵され、遂に異邦の露と消えき。

リベングストンが亞弗利加内地を往來して、辛苦を重ねしこと、前後二十餘年、之れによりて、此の國の事情、世界に知られ、科學上の裨益、また、甚だ大なりき。未開の蠻人も、彼れによりて、教化せられ、亞

赤痢

弗利加通商の端も、彼れによりて開かれき。世界地圖を開きて、亞弗利加大陸の圖を見ん者、誰れか、彼れが功蹟に思ひ及ばざらんや。

## 第二十二課 商品陳列館

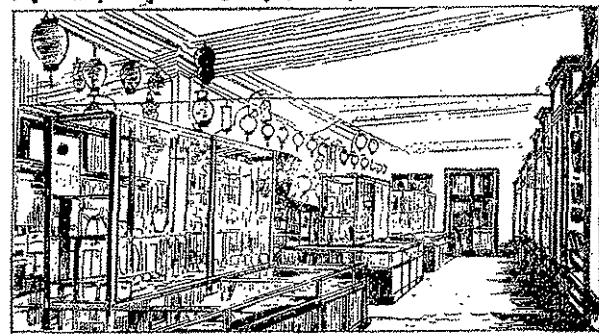
商品陳列館は、農商務省の構内に在り。規模廣大なる石造の建物なり。

陳列品は、六部に大別し、尚ほ各部を、數類に分かれて陳列せり。第一部は農産物、第

二部は林産物、第三部は水産物、第四部は礦産物、第五部は工産物、第六部は特許品なり。本館陳列の目的は、貿易の擴張と、工業の發達とに資するに在り。されば、主として、本邦の貿易品を蒐集し、一は、外國商人の觀覽に供し、一は、輸出品選擇の便宜を、內國商人に與へんと期し、旁ら、参考品として、外國製造の商品をも陳列せり。内外商品の優劣を檢せしめ、其の價格の高低を比較せしめ、併せて、内外貿易の景況、及び、其の需要、供

給の趨勢等を觀察せしめんが爲なり。要するに、本館は、實業振興上の便宜にとて、設けられたるなり。

内國產の陳列品のうち、茶、生絲の如き、主なる輸出品の外に、將來、輸出の見込ある品、又は、輸入品と競争し得べき品等あり。外國產には、主なる輸入品の外



に、内地製造の模範となる品、現に、輸出品と競争しつゝある品、乃至、目下、外國市場にて、他國より輸入し、景氣よき品にして、本邦にても、ゆく／＼製造し得べき見込あるもの等あり。

現今、輸出品の主なるものは、生絲、羽二重、米、綠茶、石炭、漆器、七寶燒等なり。得意先は、北米合衆國を第一とし、佛蘭西、香港、支那、英吉利、印度などは、之れに次ぐ。輸入品には、石油、綿、砂糖、毛布、烟草、草類、鐵類、諸器械、豆、米



等、最も多く、供給元は、英國を第一とし、支那、米國、印度、獨逸、香港等、之れに次ぐ。

國を富まささんとせば、輸出を多からしめ、輸入を少からしむるを、第一策とす。而して、それが爲めには、優等の商品を産出して、世界に、販路を廣むると共に、從來、外國に、供給を仰ぎたりし物品を、内國にて、供給する様に力むべきなり。商品陳列館は、取りも直さず、富國策の羅針盤となるべきものなり。商工業家は、宜しく、之れに就きて、内外

趨勢

※

の商品を参照し、貿易の趨勢を明らかにし、以て、商工業振興の方針を定むべきなり。

### 第二十三課 會社の歌

商ひの道も、いろくど。

問屋、仲買、小賣商。

中にも、多人數集まりて、

立つる會社のくさくは、

合名、合資、株式や、

株式合資の四類にて、

※※※

※

※ ※ ※ 取締 ※ ※

資金集めて、三五人、株を募りて、數十人、損益分かつ組織なり。その團體の役員は、株主間の互選にて、社長、頭取、その下に、取締役、監査役、雇ひ入るゝは、支配人、皆、それぐの務あり。さて、營業の第一は、

※ ※ ※ ※ 技

北海、南洋、歐米に、融通自在の銀行業、之れを、會社の幹として、製造、貿易、運輸業、枝葉の末も茂り、ゆく。千里一瞬、國內に敷きて、あまねき鐵道や、建築、造船、倉庫業、車せはしき紡績所、校にひまなき織物業。

メキシコ、布哇のはてまでも、

人を送りて、出稼ぎの

便宜をはかる移民業。

不慮の危険を保證して、

損を償ふ保険業。

生命保険に入るときは、

人は、死すとも、遺金あり。

火災保険に入るときは、

家焼かるゝも、餘財あり。

海上保険に入るときは、

持船、海に沈むとも、

その幾分は浮きぬべし。

その他、無數の會社業、

石油、石炭、鐵、砂金、

あかゞね、水産、肥料類、

或は、活版、出版業。

舉げ盡されぬ數々も、

皆、國力の本ぞかし。

第二十四課 都會と田舎

都會と田舎と、いづれか住みよかるべきか。この問に對しての答は、恐らく、人によりて異なるべし。

平生、田舎にのみ住める人は、たまく、大都會に立ち出でなば、繁華と便利とに驚きて、或は、いつまでも、こゝに居つきたしと思ふべく、都にのみ住める人は、恰も、其の反對に、或は、田舎の長閑かさを羨むべし。人は、ともすれば、餘所の境遇を羨むものなり。げにや、都會は、繁華なり。街路は、四通八

※ ※

厦

※ 梯  
比

※ 綯  
繹

瞬

達し、電信線は、蜘蛛の巢の如く、大厦高樓は、鱗次櫛比す。夜も電氣燈の光、晝をあざむき、車馬絡繹として、行人たゆることなし。

げにや、都會は、便利なり。電信や、電話や、郵便や、その送達迅速なれば、瞬くひまに、數十里の外と通信すべし。汽車あり、人力車あり、鐵道馬車あり。運輸、交通の便、備はらざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あり、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、新聞社あり、百般の商店、悉くあり。諸の實用、諸の

\*

娯樂、供給せられざるはなし。要するに、都  
は、はでやかなり、花やかなり、娯樂多し。都  
會の生活を、人の羨むも、宜なり。

されど、また、長く住めば、都會の生活には、  
苦勞多く、不愉快多し。物價貴ければ、出費  
多く、交際繁ければ、萬事うるさきこと多し。  
世間は、年中いそがしく、騒がしく、街路は、朝  
に、晩に雜沓し、砂ほこり、煙の如く立ち舞ふ。  
空氣の不潔なること甚だし。總じて、傳染  
病などの流行は、家屋稠密の地にはじまる。

離香

稠密

淳朴

都會が、衛生上によろしからざるは、明かな  
り。ましてや、火災などの害も、都會に多か  
るをや。都會生活は、危険なり、といふべし。  
田舎には、都會の如き繁華もなく、又、都會  
の如き便利もなし。されど、其の生活の心  
安さと、其の山水の清き眺めと、其の人情の  
淳朴と、其の空氣の清爽とは、都會に求め難  
き賜なり。彼の春の花、わらび取り、秋の紅  
葉、茸狩、夏の涼、螢狩、冬の雪景色さへも、都會  
の人の、深く羨む樂ぞかし。

娛樂

彼れの便利に代ふるに、此れの長閑けさ、  
静けさあり。彼れの繁華に代ふるに、此れ  
の心安さあり。いづれを優れりとも定め  
がたし。はでなる娛樂こそ、田舎住居に乏  
しけれ、衛生上、其の他の危険なきは、其の失  
を償うて、餘りあるべし。

\*

知見

さもあれ、都には、絶えず、文明の進歩あり、  
學問、藝術をはじめ、文明の利器、機關は、すべ  
て、かしこに集まりたり。田舎は、全く、これ  
に反す。知見を廣め、技能を磨かんと欲す

る者、又は、大なる事業に従はんと欲する者  
は、到底、田舎にのみ止まること能はざるべ  
し。此の點は、都を優れりとす。

要するに、都會は、修業の地なり、事業の地  
なり。安住、靜慮の地としては、田舎のかた、  
遙かに優れり。

# 國語讀本 高等小學校用 卷七 終

明治三十二年 九月廿九日 印刷

明治三十三年 十月一日 發行

明治三十三年 十二月廿三日 訂正再版印刷

明治三十三年 十二月廿六日 訂正再版發行

刷 (國語讀本 高等奧附)

卷ノ一 定價	金拾八錢	卷ノ五 定價	金廿二錢
卷ノ二 定價	金拾八錢	卷ノ六 定價	金廿三錢
卷ノ三 定價	金貳拾錢	卷ノ七 定價	金廿三錢
卷ノ四 定價	金廿二錢	卷ノ八 定價	金廿四錢

著 作 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 東京市神田區墨神保町九番地 合資 會社 富 山 房

代 表 者 合資 會社 富 山 房 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 者 東京日本橋區藥研堀町三十三番地 仁 科 衛

印 刷 所 同 所 厚 信 舍



發 兌 元

(明治廿九年 六月設立) 合資 會社 富 山 房  
長距離 (電話本局) 電報 加 入 (一〇三六番) 電報 號 山 房  
ヤ マ フ

